［大野城市立御陵中学校］

令和４年２月発行　学校便り

学校の詩

うた

学校の教育目標

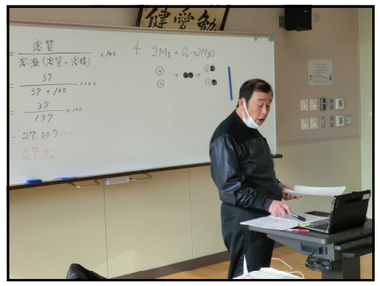
自律貢献

文責：教頭　藤田天平

◆コロナ禍だからこそ「笑顔」と「優しさ」を

１月から新型コロナウイルスの感染急拡大が続き、福岡県にも「まん延防止等重点措置」が適用されるとともに、県独自の「コロナ特別警報」も発動される事態となりました。全国の感染者数、福岡県の感染者数ともに連日過去最高を記録しています。今後もしばらくは感染拡大が続くと思われ、学校もその対応に追われています。また一方で、３年生が無事に受験に臨めるよう、オンライン学習等を行うなど、「今できること」にも積極的に取り組んでいます。

ご家庭におかれましては、ご家族の健康を第一に生活をされていると思います。また、地域におきましては、区長様をはじめ、関係者の方々が、日々地域の安心・安全を第一にご尽力いただいていると思います。互いのことを思いやって行動していただいていることに心より感謝申し上げます。



【オンライン授業の様子】

さて、社会全体がピリピリとした緊張感や殺伐とした雰囲気に包まれる中、つい人に対して厳しいことを言ってしまったり、嫌なことをしてしまったりしがちです。そのようなときだからこそ、「笑顔」や「優しさ」が本当に必要になってきます。藤井 浩彦校長は、御陵中ＨＰ「校長のひとりごと」で以下のようなメッセージを載せています（一部抜粋）。

こんなときこそイライラせず落ち着いて、子どもたちにも保護者の方にも、来訪者の方にも、“笑顔”と“優しさ”を忘れず対応していきましょう！そして、先生方同士でも声をかけあって支え合って「チーム御陵」で、乗り越えましょう！」

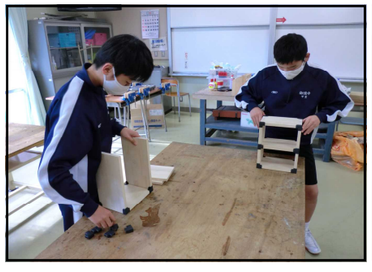
本当に手強い新型コロナウイルスです。しかし、どのような状況にあっても、絶対的な「正解」がわからなくても、知恵を出し合い協力し「最適解」を見つけていく努力をしなければなりません。

コロナ禍のこんな状況であっても、御陵中の子どもたちは本当に素直でかわいいです。こんな素敵な子どもたちと共に過ごせることは、私にとっての幸せです。

「WITHコロナ」と言われて2年以上経ち、たくさんの制約がある中、学校は少しでも子どもたちのために、「笑顔」と「優しさ」を忘れず、今できる最善の教育活動を続けていきます。ご家庭におかれましても、お子様が明るく、前向きに生活できるようご支援いただければと思います。保護者の皆様には、急なスケジュール変更や学級閉鎖、出席停止等でご心配やご迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、今後とも本校の教育活動にご協力くださいますようお願いいたします。

◆「日常」　子どもたちは真剣に取り組んでいます！

下の写真は家庭科の裁縫と技術科の木工、保健体育のダンスの様子です。子どもたちは和気あいあいとしながらも、真剣に授業に取り組んでいます。５教科の授業はもちろんですが、技能教科においても、御陵中の生徒たちは本当に真面目に取り組んでくれています。家庭科の鷲 朝菜先生は「男女ともとても楽しんで裁縫をしています。早くできあがった子は袋に刺繍をしています」と嬉しそうに話してくれました。コロナ禍で様々な制約はありますが、それぞれに工夫を凝らして授業を行っています。そして、どの授業も一生懸命取り組んでいる子どもたちは本当に素敵だと思います。



「虫の目　鳥の目　魚の目」

【教頭コラム】

「受け継がれる愛、優しさ」

「おばあちゃんはね、みんなが楽しそうにしているのを見てるのが好きなんだよ。自分は二の次」

正月、親せき中が集まる祖母の家で母が言った。幼かった私は、その意味をよくは理解できなかった。親せきが賑（にぎ）やかに話したり、子どもたちがゲームをする中、いつも祖母は火鉢の傍（かたわ）らで輪に入るでもなく、ほほ笑んでいた。

私はいつしか祖母の姿を、母に重ねるようになった。昭和一けた生まれの専業主婦。母はその人生を父と、手がかかる私たち兄妹の子育てにささげた。食事の時、並べられたおかずを父や私たちは好き勝手に食べる。母はいつも最後に残りそうな物から食べる。洋裁が得意な母は私が着なくなった洋服を直して着た。

私が仕事をするようになると「家族のため」だけに人生を送った母に、どこかもどかしさを覚えた。「もっと自分のしたい事をすればいいのに」「自分の主張はないの」と感じることもあった。

長年、家族第一、自分は二の次というのが身についてしまった母に、もっと自分の人生を楽しんでほしかった。自分の事は二の次でいいなんて不思議に思えた。何故、二の次になっていたかは想像できなかった。それぐらい、母の愛情に胡坐（あぐら）をかいていた。

しかし、自分に子どもが生まれて、最近自分も少し母に似てきたと思う。

母がいつも家に居てくれたから、安心して父は仕事で戦ってこられた。いつも母が思いやってくれたから、今私は子どもに限りない愛情を注げる。私は子どもを産むまで、そのことすら分からなかった。

それでも面と向かってありがとう、と言えないでいる。そのかわり、精いっぱい家族を大事にしようと思う。まさか仕事一色の自分の人生がこうも変わるとは思ってもみなかった。

私の子どもは男の子なのできっと一生この気持ちは分かってもらえないだろうな、と少し寂しく思う。でも、きっと後悔はしないだろう。祖母や母と同じようにみんなが楽しそうにしているのを見るのが好きになってきたから。

フリーアナウンサー・永井美奈子

私は子どもの頃、母が病弱だったこともあり、長い期間、母方の祖父母宅にあずけられていました。祖母（ここでは、「おばあちゃん」といわせてもらいます）はいつも優しく、おそらく、たくさんいた私のいとこ（おばあちゃんから見れば孫）の中でも、私を一番かわいがってくれていたのではないかと思います。近所の駄菓子屋（今はほとんど見かけませんが）に行きたいと言えば、５０円や１００円を財布から出して、「みんなには黙っときなさいね」と言ってお小遣いを渡してくれました。ご飯を食べるときも、お風呂に入るときも、寝るときもおばあちゃんが一緒にいてくれました。

そんな優しかったおばあちゃんが亡くなったことを聞いたのは、大学生の時でした。アパートの公衆電話に母から電話がかかり、おばあちゃんの死を告げられました。元々私は涙もろい方なのですが、このときほど泣いたことはないというくらい泣きました・・・。

最近、妻の姿がおばあちゃんに重なって見えるようになってきました。

夕飯をおいしそうに食べている娘と息子を嬉しそうに見る姿、自分は残りそうな物を食べる姿、大学受験や就職試験を控えた２人を心配そうに見守る姿・・・。

そこに見えてくるものは、我が子に対する「愛」「優しさ」です。私が子どものころに感じた、おばあちゃんのそれと同じものです。

いつの日か子どもたちが大人になったときに、母親の「愛」「優しさ」に気づき、感謝の気持ちをもってくれることを願っています。

私は教員として目の前にいる子どもたち一人ひとりのために、愛情と優しさをもって自分にできることを精一杯行っていくことが使命だと思っています。そして、それは私だけでなく、御陵中学校教職員全員が思ってくれていると信じています。